

# 『更級日記』小論——源資通の人物造型をめぐる

加藤 睦

一

『更級日記』のうち、不断経の夜の出来事を印象深く記した章段は、その冒頭の部分において、作者孝標女と源資通が遭遇し、朋輩女房一人も含めて語り合うことになったいきさつを、次のように書きとめている。

上達部、殿上人などに対面する人は、定まりたるやうなれば、うひうひしき里人は、ありなしをだに知らるべきにもあらぬに、十月ついたちごろのいと暗き夜、不断経に、声よき人々読むほどなりとて、そなた近き戸口に二人ばかり立ち出でて聞きつつ、物語して寄り臥してあるに、参りたる人のあるを、「逃げ入りて、局なる人々呼び上げなどせむも見ぐるし。さはれ、ただ折からこそ。かくてただ」と言ふいま一人のあれば、かたはらにて聞きあたるに、おとなしく静やかなるけはひにてもものなど言

ふ、くちをしからざなり。「いま一人は」など問ひて、世のつねのうちつけのけさうびてなども言ひなさず、世の中のあはれなることどもこまやかに言ひ出でて、さすがにきびしう引き入りがたいふしぶしありて、われも人も答へなどするを、「まだ知らぬ人のありける」などめづらしがりて、とみに立つべくもあらぬほど、……<sup>(1)</sup>

このような書き出しを読むと明らかのように、不断経の夜の出来事は、「ありなしをだに知らるべきにもあらぬ」「うひうひしき里人」である孝標女が、偶然のいきさつから、資通によつてその存在を知られることになる話として、その叙述が始められている。

日記の叙述は、このあと春秋の定めに移り、さらに資通の長い回想の語りを書き記されるが、その語りが終わった直後の記述を見る

と、  
……さらば、今宵よりは、暗き闇の夜の時雨うちせむは、また心にしみはべりなむかし。斎宮の雪の夜に劣るべきこちもせ

ずなむ」など言ひて、別れにしのちは、誰と知られじと思ひしを、またの年の八月に、……

というように、引き続き、資通から「知られる」ことが関心事になっていて、この章段の基本的な性格が読み取れるのである。

この「誰と知られじ」という作者の心中思惟については、たとえば、新潮日本古典集成が、

自分が誰であるか相手に知られまいと思っていたが、氏素性を知られずに、ただ好ましい話し相手だったとの印象だけをその人の心に刻みつけておきたいという気持。

と注を付すように、「じ」を打消意志の意と取るのが通説のようである。しかしながら、「誰と知られるか知られないか」ということは、資通の意志に左右される事柄であり、孝標女の側に主体性を発揮する余地はない。したがって、この「じ」は打消推量の意を表しているかと判断するのが妥当である。本来存在を知られることなかった「うひうひしき里人」は、たまたま資通に知られることとなったが、それは一夜の出来事であり、それ以上の関心を持たれることなく、忘れられてしまうだろうと、孝標女は思ったというのである。ところが、翌年の八月に……というように話は後日談へと続いていく。

不断経の夜の遭遇の場面で、源資通がしみじみと語った言葉、あるいは、春秋の定めにおいて孝標女が詠じた、

あさみどり花も一つに霞みつつおぼろに見ゆる春の夜の月

の歌については、中嶋朋恵氏、川村晃生氏により、『源氏物語』の影響が看取されることが指摘されている。<sup>(2)</sup> 伊藤守幸氏は、そのような先行研究を踏まえつつ、当該章段について、次のように論じている。<sup>(3)</sup>

それでは、この一夜の記事は、すべて『源氏物語』のまねび」であり、そこに『更級日記』としての個性は認められないのかと云えば、そんなことはない。(中略)ひたすら光源氏を意識した振る舞いを続ける源資通の言動の中に、如何にも『更級日記』的と言うしかない、ある特徴が浮かび上がるのである。それは、彼の詠んだ、

今宵より後の命のもしもあらばさは春の夜を形見と思はむ  
という歌に看取される、特異な感受性のありようである。(中略)「今宵より後の命のもしもあらば」とは、いささか大仰すぎる表現と感ぜられるのだが、実は、これと同趣旨の表現が、孝標女自身をも含む、この『日記』の主要な登場人物たちによって繰り返されているのである。

伊藤氏が、右の論述の中で「これと同趣旨の表現が」「繰り返されている」と述べているのは、孝標女が十八歳の時に東山に住む尼に言った「春まで命あらば必ず来む。花盛りはまづ告げよ」という

言葉と、作者と姉が一晩中語り合った夜に、姉が唐突に発した「ただ今、ゆくへなく飛び失せなば、いかと思ふべき」という言葉、ならびに、亡くなった行成女が書き記していた拾遺集所収の詠み人しらず詠、

鳥辺山たにに煙のもえ立たばはかなく見えしわれと知らなむを指している。

資通の詠歌、孝標女と姉の言葉、行成女の書き記した拾遺集歌は、伊藤氏の指摘どおり、人の命のはかなさへのやや過剰な感受性を共有している。中でも、資通の詠歌は、そのまま受けとめれば、「明日は生きていないかもしれない」と言っていることになり、確かに過剰な印象を与えなくもない。ただし、これを特異な感受性ととらえる見解については、修正を要するであろう。これ以前にも、同時代においても、同じように無常観を背景とする歌が、次のように詠まれているからである。

秋までの命もしらず春の野に萩のふるねをやくとやくかな

(後拾遺集・春上・四八・和泉式部・「題不知」)

小萩さく秋まであらば思ひいでむ嵯峨野をやし春はその日と

(後拾遺集・春上・八〇・賀茂成助・「花見にまかりける

に嵯峨野をやしけるを見てよみ侍りける」)

秋にまたあはむあはじめしらぬ身は今宵ばかりの月をだにみむ

(詞花集・秋・九七・三条院・「月を御らむじてよませ給ける」)

命あらば又もあひなむ春なれどしのびがたくてくらす今日かな

(千載集・春下・一二三・中務卿具平のみこ・「やよひのつごもりによみ侍りける」)

明日しらぬ命なれども誓ひおかむこの世とのみは思はぬなかを

(能宣集・二一一・「かたらひ侍る女のもとにて、ちかごといたうしはべれば、命みじかりなむといひ侍るに」)

右のような歌を参照すれば、孝標女の言葉や資通の和歌に表現された感性が、特異なものとは言えず、同時代においてある程度共有された感性であったことが了解されるであろう。

さらに、この章段への影響が指摘されている『源氏物語』において、光源氏は、自らの遠からぬ死を意識して、

春までの命も知らず雪のうちに色づく梅をけふかざしてん

という歌を詠んでいる(幻巻)。この歌が、孝標女の言葉や資通の詠歌に影響を与えていることも十分考えられよう。

このように、資通、孝標女、姉、行成女が共通に示している心性は、特異なものとは言えない。しかし、そのことは、そこに看取される心性を『更級日記』的なものと認定することを妨げるものではなく、必ずしもないであろう。

『更級日記』的な心性とは、物語への過剰な傾倒を抜きにすれば、時代から隔絶した特異なものではなく、むしろ時代の心性と連続性を有するものと考えられる。日記中に描かれた他者の言動に、孝標女と共通する心性が見出さ

れる場合、作者が自らの感性を共有している他者の言動に共感しつつそれを書きとめたと考えるのが自然であり、そこに『更級日記』的なものを読み取る試みはもつと積極的になされてよいと考える。

### 三

神拝といふわざして国の内ありきしに、水をかしく流れたる所の、はるばるとあるに、木むらのある、をかしき所かな、見せでと、まづ思ひいでて、ここはいづことかいふと問へば、子忍びの森となむ申すと答へたりしが、身によそへられて、いみじくかなしかりしかば、馬より下りて、そこにふた時なむながめられし。

作者の父孝標が、任地から作者に宛てた文に記された右の挿話には、「子忍びの森」という名前によつて心を動かされたことが記されているが、ここで注目したいのは、「馬より下りて、そこにふた時なむながめられし」という孝標の行動である。このように、特定の場を立ち去りがたく時を過ぐす様子は、孝標女自身の経験を回想した記事にも次のように散見するものであり、『更級日記』的な行動・心性と認定することができる。

○門出したる所は、めぐりなどもなくて、かりそめのかや屋の、部などもなし。簾かけ、幕など引きたり。南は遙かに野の方見やらる。東西は海近くていとおもしろし。夕霧たちわたりてい

みじうをかしかければ、浅寝などもせず、かたがた見つつ、ここに立ちなむこともあはれに悲しきに……

○またの日、山の端に日のかかるほど、住吉の浦を過ぐ。空も一つに霧りわたれる、松の梢も、海の面も、浪の寄せくる渚のほども、絵にかきても及ぶべき方なうおもしろし。

いかに言ひ何にたとへて語らまし秋の夕べの住吉の浦

と見つつ、綱手ひき過ぐるほど、返り見のみせられて、あかずおぼゆ。

右の記事に示されたような名残惜しさ、立ち去りがたさは、自分が身を置いた場の雰囲気に入り切る思い入れの深さを前提とするものである。

その夜は、くろとの浜に泊まる。片つかたはひろ山なる所の、砂子はるばると白きに、松原しげりて、月いみじうあかきに、風のおともいみじう心細し。人々をかしがりて歌よみなどするに、

まどろまじ今宵ならではいつか見むくろとの浜の秋の夜の  
月

『更級日記』の前半部、いわゆる上洛の記の中に書きとどめられたこの「まどろまじ……」の歌から読み取れる孝標女の心性について、伊藤氏は次のように論じている。<sup>4)</sup>

旅の途中で目に触れる一期一会の風景の貴重さを慈しむような思いのこめられた歌である。眼前の光景に対する愛惜の思いを

伝えるこの歌は、現在の瞬間に対する切実な愛着を示すものとなつてゐるが、同時にこの歌は、「今宵ならではいつか見む」という表現において、その「現在」を遠くから俯瞰するまなざしを覗かせるものとなつてゐる。

右の論述の中で指摘されている、「眼前の光景に対する愛惜の思ひ」「現在の瞬間に対する切実な愛着」は、不断経の夜の邂逅の場面です。資通が伊勢での経験を回想して語つた言葉にも横溢しており、資通と孝標女が、同じ心性を確実に共有していることを実感させる。

斎宮の御裳着の勅使にて下りしに、暁にのぼらむとて、日ごろ降り積みたる雪に月のいと明かきに、旅の空とさへ思へば、心ほそくおほゆるに、罷り申しに参りたれば、余の所にも似ず、思ひなしさへ気おそろしきに、さべき所に召して、円融院の御世より参りたりける人の、いとみじく神さび、古めいたるけはひの、いとよしふかく、昔のことども言ひ出で、うち泣きなどして、よう調べたる琵琶の御琴を差し出でられたりしは、この世のこととおほえず、夜の明けなむも惜しう、京のことも思ひたえぬばかりおほえはべりしよりなむ、冬の夜の雪降れる夜は、思ひ知られて、火桶などをいだきても、かならず出でるてなむ見られはべる。

右のように回想される場面において、資通は場の雰囲気に入り切り、さらに「夜の明けなむも惜しう、京のことも思ひたえぬばかりおほえはべりし」というように、その場を立ち去ることへの名残惜

しさを感じている。<sup>6)</sup>ここに看取される資通の心性が、孝標女のそれと近似するものであることは明らかであるが、さらに資通は、伊勢での経験を後々まで忘れず心に刻み付け、孝標女たちにそれを語つていて、そのような、(場への思い入れ↓名残惜しさ↓回想↓他者への語り)という展開が、孝標女が過去を回想し『更級日記』を書き綴る営為そのものと重なり合っている点においても、資通を『更級日記』的人物と評することができるであろう。

#### 四

くろとの浜で十三歳の作者が詠じた、

まどろまじ今宵ならではいつか見むくろとの浜の秋の夜の月  
という和歌について伊藤氏が指摘している、もう一つの要素、すなわち「その「現在」を遠くから俯瞰するまなざし」もまた、

○今宵より後の命のもしもあらばさは春の夜を形見と思はむ

○今宵よりは、暗き闇の夜の、時雨うちせむは、又心にしみ侍りなむかし。斎宮の雪の夜に劣るべきこちもせずなむ

という資通の発言や詠歌に容易に見出せ、孝標女の心性との親和性を確認できる。ここで資通は、不断経の夜における「今宵」の経験を深く心に刻み、それをいつまでも忘れることのない人物として、自身を表現している。そして、その自己表現が偽りでなかったことは、翌年八月の再会の際に、彼が「時雨の夜こそ、片時忘れず恋し

くはべれ」と言ったことよって証明されるのである。

孝標女が、過去の経験を忘れずに恋しく思い出す人であったことは、『更級日記』そのものが示すことであるが、日記中のさまざまの記事において、作者は自らを、経験を心に深く刻み、それをいつまでも忘れない人物として描いてみせている。

○そこに遊女ども出でて来て、夜ひとよ、歌うたふにも、足柄なりし思ひ出でられて、あはれに恋しきことかぎりなし。

○ひろびろとも深き深山のやうにはありながら、花紅葉のをりは、四方の山辺も何ならぬを見ならひたるに、たとしへなくせばき所の、庭のほどもなく、木などもなきに、いと心憂きに、向ひなる所に、梅紅葉など咲きみだれて、風につけてかかへ来るにつけても、住み馴れしふるさとかぎりなく思ひ出でらる。にほひくる隣の風を身にしめてありし軒端の梅ぞ恋しき

○うらうらとのどかなる宮にて、同じ心なる人三人ばかり物語なとして、まかでてまたの日、つれづれなるままに、恋しう思ひ出でらるれば、二人の中に、

袖ぬるる荒磯浪と知りながらともにかづきをせしぞ恋しき  
○同じ心に、かやうに言ひかはし、世の中の憂きもつらきもをか  
しきも、かたみに言ひかたらふ人、筑前に下りてのち、月のい  
みじう明かきに、かやうなりし夜、宮にまわりてあひては、つ  
ゆまどろまず、ながめあかいしものを、恋しく思ひつつ寝いり  
にけり。

このように、作者は、過去を恋しく思い出す自分の姿を、繰り返して繰り返して作中に描きこんでいる。同じように作中に描かれる、物語に耽溺する存在、あるいは花・紅葉の思いに浸る存在としての自分、やがて相対化されるいは否定されることになるが、過去を恋しく思い出す存在としての自分は、相対化されることなく描き続けられるのである。

## 五

伊藤氏は、資通が、

今宵より後の命のもしもあらばさは春の夜を形見と思はむ  
と詠じた際、孝標女がそれをどのような思いで受けとめたのかについて、次のように論じている。<sup>(5)</sup>

この場面には、(中略)資通の歌に対する孝標女の思いは一切記されていない。しかし、人の世のはかなさに対する鋭敏すぎるほどの感受性の持ち主である孝標女が、この歌に反応しないはずがない。『源氏物語』を踏まえた言動を重ねる資通に対して、孝標女は、知的興味と興奮をかき立てられていただろうが、この歌を目にした瞬間、その興奮は、自分と心を同じくする者を見いだしたことに對する、深い驚きと喜びへと変じたはずである。その喜びについて、『日記』は直接的には一言も言及しないが、資通の発言を一つ残らず記しとどめようとすることのよ

うな、この克明な記事の存在そのものが、彼女の共感の深さを如実に物語っているのである。

すでに論じたように、資通が孝標女にとって「自分と心を同じくする者」であったことを、「今宵より……」の歌に限定して考える必要はなく、決して特異なものには見えない資通の言動にも、孝標女と共通する心性を見て取ることができる。したがって、伊藤氏によって指摘されている孝標女の「喜び」や「共感の深さ」は、不断経の夜の出会いと、その後日談を記した二連の叙述の全体から、広く感じ取れるものであると考える。

冬になりて、月なく、雪も降らずながら、星の光に、空さずがにくまなく冴えわたりたる夜のかぎり、殿の御方にさぶらふ人々と物語し明かしつつ、明くればたち別れたち別れしつつまかでしを思ひ出でければ、

月もなく花も見ざりし冬の夜の心にしみて恋しきやなぞわれもさ思ふことなるを、同じ心なるをかしようて、

冴えし夜の氷は袖にまだ解けて冬の夜ながら音をこそは泣け

右の章段において、夜通し親しく語り合ったことを恋しく思い出した関白家（頼通家）の女房が、「月もなく……」の歌を詠み贈ってきたのを受けて、孝標女は、「われもさ思ふことなるを、同じ心なるをかしよう」感じたことと記している。ここにもまた、心を同じくする者を見出した喜びが看取されるが、その喜びは、同じ心なる人を

見出したことにとどまらない。関白家の女房が思い出し、恋しく思っているのが、孝標女と共通の経験であり、その女房から歌を贈られた孝標女は、恋しく思い出される存在となっているからである。「同じ心なるをかしよう」という叙述には、他者から思い出される喜びがこめられているのであろう。このように、共通の経験を他者が恋しく思い出し、そのことよって孝標女が思い出される存在として位置づけられている点は、不断経の夜の翌年の叙述と共通している。読経の人は、この遣戸口に立ち止まりて、ものなど言ふに答へたれば、ふと思ひ出でて、「時雨の夜こそ、片時忘れず恋しくはべれ」と言ふに、ことながう答ふべきほどならねば、

なにさまで思ひ出でけむなほざりの木の葉にかけし時雨ばかりを

先に確認したように、孝標女は、自身を思い出す存在として繰り返し描いているが、その彼女が資通から思い出される存在として描かれていることの意味を考えてみたい。

からうじて思ひよることは、「いみじくやむごとなく、かたち有様、物語にある光源氏などのやうにおはせむ人を、年に一たびにても通はしたてまつりて、浮舟の女君のやうに山里に隠し据ゑられて、花、紅葉、月、雪を眺めて、いと心ほそげにて、めでたからむ御文などを、時々待ち見などせめ」とばかり思ひつづけ、あらましごとにもおぼえけり。

物語に耽溺していた当時の孝標女は、理想的な生活を右のように

夢想していた。山里に暮らす女は、いつ忘れられてもおかしくない心細い存在であるが、忘れられることなく貴人から思い出されて、文を送られる。そのような存在でいることが、彼女の夢想の対象となっている。他者から忘れられず思い出されることに、孝標女が重い意味を見出していたことが、ここからうかがえるであろう。

おのれは、侍従の大納言殿の御むすめのかくなりたるなり。さるべき縁のいささかありて、この中の君のすずろにあはれと思ひで給へば、ただしばしここにあるを、このごろ下衆の中にありて、いみじうわびしきこと。

姉の夢に現れた猫が語った右の言葉には、他者から思い出されることが、存在し続けることを意味し、忘れられることはとても悲しいことだという感じが看取される。

行成女が書き遺した詠み人しらず詠、

とりべ山たにに煙のもえ立たばはかなく見えしわれと知らなむは、この身が亡くなって煙となって昇ったら、それが自分だと知ってほしいというように、死んだ後も、思い出され存在が認知されることを希求した歌であって、猫の言葉ともども、思い出される存在することとの関係において捉えられていることがうかがえるであろう。

本稿の冒頭に述べたように、不断経の夜の出来事と、翌年の再会を記した一連の叙述は、「ありなしをだに知らるべきにもあらぬ」孝標女が、偶然の出会いによって資通にその存在を知られる話とし

て読むことができる。再会した際に資通が発した「時雨の夜こそ、片時忘れず恋しくはべれ」という言葉は、「誰と知られじ」と悲観していた作者に、資通から忘れられず思い出されたことの喜びを感じさせ、彼女の心を深くゆり動かしたはずである。

日記の末尾近くの記事において、甥が訪ねて来た際に詠まれた、月も出でて闇にくれたる姨捨になにとて今宵たづね来つらむという歌には、自身を世から捨てられた存在としてとらえ、自分を甥が訪ねて来てくれたことの喜びを「なにとて」と控えめに表現している。

資通から「時雨の夜こそ、片時忘れず恋しくはべれ」と言われて、孝標女が詠んだ歌、

何さまで思ひ出でけむなほざりの木の葉にかけし時雨ばかりをにも、「ありなしをだに知らるべきにもあらぬ」取るに足りない存在であるはずの自分が、同じ心を共有する資通から、その存在を記憶され認知されていることへの喜びが、ごく控えめに表現されているのである。

#### 注

(1) 『更級日記』からの引用は、秋山虔校注『新潮日本古典集成 更級日記』(一九八〇年、新潮社)により、一部表記の改変を行った。

(2) 中嶋朋恵「春秋優劣論と冬の月」(『東京成徳短期大学紀要』

一九八四年三月)、川村晃生「浅みどり花もひとつに」(『銀杏鳥歌』一九九三年六月)。

(3) 伊藤守幸「「あさみどり花もひとつに霞みつつ……」詠に関する考察」(『更級日記の遠近法』二〇一四年、新典社)。

(4) 伊藤守幸「東海道上洛の記の時間構造について」(『更級日記の遠近法』二〇一四年、新典社)。

(5) 注3論考に同じ。

(6) 新潮日本古典集成は、「夜の明けなむも惜しう」に「いつまでもその場の雰囲気浸っていたい気持ち」と注を付す。

(かとうむつみ 本学教授)